東方學報 京都第七三冊（二〇〇一）：一五七―一八四頁

元朝の科擧資料について
――錢大昕の編著を中心に――

森田憲司

はじめに
一　宋元科擧題名錄と元統元年進士題名錄
二　元進士考
三　新刊類編歷擧三場文選
四　錢大昕の見た資料、見ていない資料―結びに代えて

はじめに

今日における元朝史研究の第一歩を記したのは、清朝の考證學の第一人者である錢大昕である。彼は、倉卒の閒に編まれて粗雜の評の高かった『元史』の再編を目指し、資料の收集と研究をおこない、『元史稿』を撰述しようとしたとされるが、その稿本は散逸して傳わらず、[1] 今日殘る元史研究の成果は、『二十二史考異』の元史に關わる部分を除けば、『元史氏族表』、『元史藝文志』の二つを殘すのみである（もちろん、『十駕齋養新錄』や『潛研堂金石文跋尾』などにも、元朝史にかかわる優

れた記述が少なくないが)。

しかし、最近になって、これまで利用するのが困難であった、錢大昕が關係した元朝科擧關係資料が相次いで出版された。すなわち、『北京圖書館古籍珍本叢刊』第二一卷(書目文獻出版社)所收の『宋元科擧題名錄』と『元統元年進士題名錄』、そして江蘇古籍出版社の『嘉定錢大昕全集』第五卷所收の『元進士考』である。本稿では、この三つの編著、とくにそこで利用されている資料類を手がかりとして、元朝の科擧資料について再檢討を加えたいと考える。

こうしたことを筆者が考えるに至ったのには、最近の元朝史研究をめぐる資料狀況、具體的には資料へのアプローチの狀況の變化もかかわっている。中國の改革開放の進展により現地調査が可能となったこと(とくに石刻資料)、影印出版の增加、研究の國際化、電子化などである。この論文の執筆を可能にした背景にもこれらの變化があることは、以下で觸れることになろう。

さて、錢大昕の著述について述べる前に、元朝科擧研究の現況についても見ておきたい。各種の研究動向の類で指摘されるように、最近我國では、モンゴル元朝期史研究が活況を呈している。[2] しかし、關心はモンゴル史からの視點に偏りがちで、もう一方の、中國王朝としての元朝への關心は、必ずしも高いとは言えない。話を科擧に限定すると、『元史』や『元典章』の記事を材料とした制度の概述ははやくからあるが(たとえば有高32は、早い時期の概說としてはよく資料を涉獵しており、すぐれたものである)、とくに合格者の分析については、一九八〇年代になってからの、登科錄についての蕭啓慶氏の一連の研究がその端緒を開くものであった。そして、近年になって、植松正氏の延祐二年の科擧の合格者の官界における地位についての追跡(植松89)、楊訥氏の『元統元年進士題名錄』の校訂(楊94)、陳高華氏の泰定元年の科擧についての研究(陳96)などの論考が發表され、[3] 最近では、蕭啓慶氏は、元朝の登科錄全體の復元、公開を目指していることを公表されてもいる(蕭99a)。また、制度面からのアプローチとしては、鄕試についての李治安氏の研究が發表された(李99)。

こうしてみると、中國、臺灣においては、第一線の有力研究者がこの問題について發言していることがわかる。これに對して我國においては、元朝科擧についての關心が比較的少なく、有高の他にも、田中萃一郎、箭内亙などによる制度的研究が早い時期にあるが、戰後では宮崎市定の獨自の視點からの科擧「再開」の背景についての研究（宮崎65）と、上述の植松論文くらいしか見當たらない。おそらくは、戰前から續く元朝の中國支配、とくに漢人知識人への支配についての一般的なイメージ、すなわち「士大夫の冬の時代」とでも言うべきもの、の強さがその背景にあるのであろう。なお、筆者自身は、元朝の科擧についてのいくつかの文章の中で、これまでの元朝史研究での科擧への輕視は、中國支配の開始から實施までの空白期間の長さや中斷の存在、なにより合格者數の少なさなどによるものであろうが、科擧への具體的研究、とくにその合格者の確認という作業が充分におこなわれてこなかったのではないか、ということを述べている（森田90、99他）。

一　宋元科擧題名錄と元統元年進士題名錄

『北京圖書館古籍珍本叢刊』第二一卷は史部傳記類の書物を集めた卷であるが、その中に、錢大昕に關係するものが二件影印されている。

『宋元科擧題名錄』清鈔本

『元統元年進士題名錄』影元清鈔本

の、二つである。[4] まず、この二つの資料について見ておきたい。

ア　元統元年進士題名錄

本書は、題名のとおり、元統元年（一三三三）の科擧の登科錄で、現存する唯一の元代の登科錄としてよく知られ、これまでも資料としてしばしば利用されてきた。今回影印された本の最後にも記されている黃丕烈の跋によれば、乾隆六十年（一七九五）に、元刊本を蘇州の古書肆で發見、購入し、錢大昕によってその價値を見出されたという。[5] 今回影印された本は、北京圖書館が所藏する二つの淸鈔本のうち、瞿氏鐵琴銅劍樓舊藏の陳揆稽瑞樓舊藏鈔本である[6]（『鐵琴銅劍樓藏書目錄』卷三著錄）。北京圖書館には、もう一つ、後述の『元進士考』と合訂されている、錢大昕手鈔本と考えられるものも所藏されている。楊訥氏によれば、後者は、影鈔本ではなく、行款格式や字體が原本には據っておらず、原本に殘闕や不明箇所があれば、錢大昕が自分の考えで增補しているとのことである（楊94）。

『元統元年進士題名錄』の通行本は、民國一二年（一九二三）に徐乃昌によって、『宋元科擧三錄』の一つとして景刊されたもので、この『宋元科擧三錄』に據った排印本も、『元代史料叢刊』の『廟學典禮』に附載して近年刊行された（浙江古籍出版社、一九九二、ただし、登第者名の部分のみ）。その一方で、中國國內には、今回影印された鈔本以外にも、いくつかの黃氏本に據る淸鈔本が現存するのであるが、[7] 淸鈔本の公刊は今回がはじめてである。元刊景刊本が存在する以上、淸鈔本は不要のように思われそうであるが、必ずしもそうではない。というのも、黃氏舊藏本は現在では所在不明であり、これまで一般的に利用されてきた『宋元科擧三錄』本には、誤刻がある上に、黃氏舊藏元刊本の景刊と稱するものの、編者徐乃昌と底本の接點がよくわからないことが楊94で指摘されている。[8] つまり、はたしてテキストとしていずれが優れているかという問題が存在するのである。

蕭啓慶氏は、『宋元科擧三錄』本を底本として他の竝行資料との校勘をおこない（蕭83）、これを踏まえて『元代史料叢刊』本においても校訂は重ねられているが、楊94は、それを一歩進めるとともに、北京圖書館の二つの鈔本との比較も詳細に

おこなっている點に、その特長がある。こうした背景を考えると、今回影元刊鈔本が公刊されたことは、意味があると言える。[9]

イ　『宋元科擧題名錄』

まず、本書の構成を掲げ、それぞれの資料についての竝行資料を注記する。[10]

『宋元科擧題名錄』構成

※資料名は本書の表記のまま、［錢］は錢大昕の、［王］は王鳴韶の跋があることを示す

宋紹興十八年進士題名記［錢］（本論文の對象外なので、竝行資料は畧す）

延祐甲寅科江西鄉試錄（延祐元／一三一四）［錢］

※答案のみ八篇（「石鼓賦」[11]）

山東鄉試題名記（至正一〇／一三五〇）

乾隆歷城縣志二四（移錄）、山左金石志二四（著錄）、潛研堂金石文跋尾二〇（著錄）

山東鄉試題名碑記（至正二二／一三六二）

乾隆歷城縣志二四（移錄）、潛研堂金石文跋尾二〇（著錄）、授堂續跋一四（著錄）

至正十一年進士題名記［錢］

金石萃編未刻稿（移錄）

至正庚□國子□貢試□名記（庚子＝二〇年／一三六〇）［錢、王］

※登第者名のみ移錄（『金石萃編未刻稿』に記文も含めて移錄）

至正丙午國子監公試題名記（丙午＝一二六年／一三六六）［錢］

※登第者名のみ移錄（原碑には記文あり）

このように、七件の資料のうち、六件が元朝の科擧に關わるものであり、「延祐江西鄉試錄」を除いては、石刻資料を移錄したものである。ただし、鄉試や國子監貢試にかかわるものがほとんどで、進士の題名は、「至正十一年進士題名記」のみである。ここでは、これを中心とする北京孔子廟所在の科擧關係碑刻の檢討をおこないたい。

北京の孔子廟の元朝科擧關係碑刻はよく知られており、これらの碑が清朝の康熙年間に再度出現したことについてもしばしば言及されるが、煩を厭わず記述しておくと、元代においては、科擧が實施されて、進士登第者が決定すると、その名前は石に刻して首都の國子監に立てられた。このことについては、『元史』選擧志科目に

又擇日、諸進士詣先聖廟行舍菜禮、第一人具祝文行事、刻石題名於國子監。

とあるし、『新刊類編歷擧三場文選』（以下『歷擧三場文選』と畧）や『新編事文類聚翰墨全書』（以下、『翰墨全書』と畧）所收の「進士受恩例」（延祐二年四月中書省劄付）にも立石題名について定められている。(12)

また、立石が實際におこなわれ、題名碑が國子監に立っていたことについては、宋褧の『燕石集』卷一五の「書進士題名石刻後」や、吳師道の『禮部集』卷一八の「辛酉進士題名後題」などに見える、趙伯器という人物が國子監の典簿の時に、後至元の中斷までの七擧の科擧の題名碑の拓本を作成して、各次の科擧の合格者から一人を選んで跋を書かせたという逸話から知ることができる。ただし、明代になって、阮安が太學の建築を督した際に元の進士碑の刻字を磨去し、その石が明の進士題名碑に用いられたという（『水東日記』卷二八・舊碑石、有名な「孔子加封碑」も明代には倒れたままになっていたと、

同じ巻の「前元加封孔子制碑」にある）。

ところが、清朝の康熙三一年（一六九二）に、廟内、大成殿後にある孔子の父を祀った啓聖祠（崇聖祠）の工事に際して、石碑が三つ出土した。その經緯については、『碑傳集』巻四六・吳苑傳、『骨董瑣記』巻五・元題名碑、『（乾隆）欽定國子監志』（文淵閣四庫全書本）巻四八金石三・題名（道光志では巻六二）などに記事がある。[13]

この三碑が、本書に收められている。

a　至正十一年（一三五一）進士題名碑

b　至正庚□國子□貢試□名記（至正庚子／二〇／一三六〇）

c　至正丙午國子監公試題名記（至正丙午／二六／一三六六）

の三つである。このうち、aとcについては、現在も孔子廟（首都博物館）の大成門の前に立つが、bは文字面が剝落したか、もしくは所在不明と考えられている（張寧97）。[14] なお、この他に、趙孟頫の撰になる延祐二年（一三一五）の題名碑があると、孫承澤の『春明夢餘錄』が書くが（巻六七）、『欽定國子監志』の記事によれば、乾隆時代にはすでに存在しないとされている。一方、一九三〇年代に編まれた『北京市志稿』は、現在文字が漫患不明の一碑について、延祐二年と至正庚子の兩方の可能性があるとしている（金石志巻一、燕山出版社本第九巻）。

この出土資料に關心を持ったのが、錢大昕だった。乾隆乙未（四〇／一七七五）一一月二八日の日付のある、王鳴韶（王鳴盛の弟）の撰した「至正庚子國子監貢試碑」の跋には、次のようにある。

三碑は倶に國子監大成門外に在る。錢竹汀先生は陪祀の時にこれを見て、採錄して「元遺事」の中に入れた。各篇の後に考證を付してあるのは、皆な先生の筆である。私は先生の書齋から借用して抄して一篇として、山東鄉試題名記の後に附した。先生はただその大畧と科目、人名を節取したのみで、その記文と執事の官僚（の名前）とは、いずれも

書き寫してはおらず、全文ではないので、附錄とした。[15]

この跋文にあるように、『宋元科擧題名錄』所收の三碑のうち、國子監試の二つについては、合格者の人名しか書かれていない。ただし、上にも書いたように、至正十一年碑と至正庚子碑の二つは、『金石萃編未刻稿』に全文が收められ、至正丙午年の碑記については、現在も碑が存在して刻されている文字を讀むことができるから、いずれの碑記についても、その全文を讀むことが可能である。

さて、「至正十一年進士題名記」は、すでに錢大昕が、『宋元科擧題名錄』の跋において、「元石已亡、後人重刻故多誤字」と、指摘しているように、問題を有する碑である。錢大昕が「後人重刻」と指摘した根據は分からないが、現在首都博物館となっている明淸孔子廟の前庭に立つこの碑の現狀を見る限り、この碑が原碑でないことは明らかである。

碑の現狀と『宋元科擧題名錄』を參照しつつ、この碑の持つ問題點を整理しておきたい。

誤字の問題　錢大昕の言うとおり誤字の多さが、この碑の問題の一つである。『宋元科擧題名錄』では、個々の箇所に錢大昕が注記を加えているが、元代の原碑とは考えられない誤り、例えば、朝列を翰列、可を河と誤るといった類が多い。

文字の缺落　より明瞭な本碑の問題點は、少なからず見られる文字の缺落箇所において、碑面には剝落その他の物理的變化は生じておらず、まったく未刻の平面であることである。これは、重刻の際に、原石に缺落している文字については、未刻で殘したためと考えられる。量的に一番大きいのは、各行行末の何字かが缺落していることであり（『宋元科擧題名錄』で、「以下闕」と注記されているのがその箇所）、登第者名にも不完全なものが少なくない。例えば、蒙古色目の第三甲の部分にある、臺や兒一字しか殘されていない部分は明らかに名前の一部分のみの殘存である。

なお、現在の碑石には、第一行から四行にかけて、比較的新しい剝落があるが、その部分の文字が移錄されている點で、

『宋元科擧題名錄』は、『未刻稿』とともに資料價値がある。

この碑に見える合格者名についても、蕭啓慶氏に研究がある（蕭86）。氏は、「本記的原碑當已不存」として、『金石萃編未刻稿』に基づいて校注をおこなっているが、その意味するところは不明である。

ところで、康熙年間に一緒に出土した二碑のうち、現存している、「至正丙午國子監公試題名記」についても、文字の缺落部分が平面で放置されている點は同様であり、この碑についても同じく後刻のものと考えられる。

また、『宋元科擧題名錄』には、鄉試の題名も收められているので、觸れておきたい。

山東鄉試題名記（至正一〇／一三五〇）

山東鄉試題名記（至正二二／一三六二）

延祐甲寅科江西鄉試錄（延祐元／一三一四）

であるが、すでに書いたように江西のものは答案のみであるが、山東の二碑は試驗の經緯を具體的に叙述しており、試驗に關與した官員名についても詳しく書かれていて、資料としての價値は大きい。これまで、元朝科擧研究において、鄉試への關心は必ずしも高くはなかったが、植松正氏が、官員任用における鄉試の役割を指摘し（植松89）、さらに李治安氏が鄉試の制度的研究をおこなうなど（李99）關心が向けられつつある。[16]

『宋元科擧題名錄』の書物としての成立について、最後に書いておく。これまで見てきたように錢大昕と關わりのある石刻が多いのであるが、上に引いた孔廟の三碑についての王鳴韶の跋に、「予從其齋借得抄成一篇、附于山東鄉試題名記後」と、彼が資料を排列したことを示す表現があることと、「江西鄉試錄」の錢大昕の跋に、「頃ごろ、鶴谿主人、予に從いて觀んことを索む、因りて舊藁を檢して之を別紙に寫して幷せて付去す」と、錢大昕から王鳴韶に資料が提供されたことを述べていることから考えて、錢大昕が收集した資料に基づいて王鳴韶が一册の本にまとめたものと考えるのが、妥當であ

ろう。

二　元進士考

『元進士考』については、『北京圖書館古籍善本書目』に、「錢大昕輯　稿本一册、行字不等」とあり、これまで存在のみが知られていたが（蕭88、黄00が紹介）、今回、江蘇古籍出版社の『嘉定錢大昕全集』第五巻に、校點を施して排印され、はじめて公刊された。全集第一巻にある「前言」には、北京圖書館所藏稿本を工作本としたとある。『中國古籍善本書目』にも、北京圖書館本しか著錄されていない。

『元進士考』の内容は、その題名のとおり、元朝における科擧について、合格者の氏名を收集したものであるが、やはり「前言」によれば、全部で進士五一三名、鄕試については五三八名が檢出されているとある（後述のように、この人數のすべてが間違いなく登第者というわけではない）。すでに書いたように錢大昕が『元史稿』の著述を目指していたことから考えて、本書もそのための作業の一部をなすものであろう。ただし、楊訥氏によれば、本書はすべてが錢大昕自身の筆になるわけではなく、『元進士考』という題名も後人の付けたものだという。また、『元統元年進士題名祿』の鈔本も合訂されているとのことである（楊訥94）[17]。

さて、全集本を見る限りでは、『元進士考』は、とくに章立てされてはおらず、ところどころに見出しがあるのみである。そこで、まず「元進士考」の構成について整理し、錢大昕が各部分で利用した資料について見ておきたい。頁數は、全集本の頁數である。

一頁　延祐乙卯會試以下
※『歷擧三場文選』に一致、ただし、丁集および庚集以下は利用されていない（『歷擧三場文選』については後述）

五頁　延祐甲寅鄉試以下
※『歷擧三場文選』に一致、利用部分は會試と同じ

一七頁　蒙古色目人第一甲三名以下
※『元統元年進士題名錄』に據っている

三六頁　元統元年會試以下
※おそらく『元統元年進士題名錄』の會試順位による再配列

三七頁　廬熊蘇州府志元朝科擧取士類以下
※靜嘉堂文庫所藏『洪武蘇州府志』卷一三の元朝登第者名と一致

三八頁　延祐二年以下
※各科擧ごとに進士の名を記し、個々の人物について典據を明記しており、本文というべきもの

七三頁　偰燾以下
※年次未詳などの人物についてのメモ的なもの

七五頁　延祐甲寅以下
※鄉試の合格者名簿であるが、典據不確定（至正庚寅については、「山東鄉試題名碑」を利用しているが、『潛研堂金石文跋尾』にやはり著錄されている同じ山東の「壬寅鄉試題名碑」は參照していない）

八六頁　江西通志選擧志

※「江西通志」から鄉試と進士名をぬきだしたもの。（「江西通志」をめぐっては後述）。

一三〇頁　貼條（全集編者の假題）

一三二頁　逸話集（出典表示、全集本はこの部分のみ活字の字體を變えているが、理由は不明）

このような構成を見ると、本文とでも言うべき三八―七五頁の部分を除いては、特定の資料から元朝の進士名あるいは關連記事を收集したものであり、おそらくは資料を書きぬいて竝べた段階の、長編とも言えない、ノート的なものと理解していいであろう。なお、原本の調査の機會をいまだ得ていないので確かなことは言えないが、今回の排印本には、何ヶ所かの原本の誤讀によると考えられる閒違いがあるから、原鈔本はくずし字を含んだ走り書き的なものなのかもしれない。

ところで、錢大昕自身もここに集められた「進士」のすべてが正しいとは考えているわけではない。例えば、至治元年進士のうち陶津の條（全集本四七頁）に、「浙江志」は、至治宋本榜に吳師道他の三人を載せる一方で、至治元年辛酉林仲茂榜に陶津などの四人を列していることを指摘して、「浙志は大率そ信ずるに足らず、此に附して考を挨つ」としている。[18]

また、錢大昕は、『進士考』において、上記の「浙江志」の他にも、「福建通志」、「陝西通志」をはじめとして、いくつかの地方志を利用している。[19] 元朝同時代資料による登第者の檢出にはおのずから限界があり、次なる資料源として、多數現存する地方志の利用は當然考えらるのであるが、そこに擧げられている登第者名の信賴度についてはかなり問題がある場合が多い。その代表が「江西通志」である。錢大昕は、『十駕齋養新錄』卷一四・江西通志において、「江西通志」では、元統元年の進士として一五人の名前が擧げられているが、『元統元年進士題名錄』には六人しか名前が見出せず、さらに通志に無い人物が二人いるなどの例を擧げて、「皆誕妄不足信」と言い、劉秉忠が金の瑞州を本貫とするのを、江西の瑞州の

人とするのに至っては、「噴飯」としている。上の本書の構成を見てもわかるように、「江西通志」だけが、別立てにされているのはこうした理由によるものであろう。江西省については、今日では、日本および臺灣に現存する通志から縣志に至るまでの地志のほぼすべてを影印で見ることができるので、今回調査をおこなったところ、全部で約三百名の「進士」を收集することができた。これは元朝の進士總數が一一三五名であり、半數は蒙古色目で占められる定めになっていることを考えると、信じ難い數字である。とくに、嘉靖の通志に大量の「進士」が見える。地志は、過去についての記事は、以前のものを踏襲するのが一般的であるが、『光緒江西通志』は、『十駕齋養新錄』のこの箇所を引用して、過去の通志を批判している（ただし個々の登第者名については、確認できないということで、舊志をそのまま踏襲）。

こうした科擧資料としての地方志の問題や、文集類所收の科擧關係資料など、『元進士考』を題材としてさらに檢討すべき問題が存在するが、ここでは、節を改めて、本書が引用している『歷擧三場文選』について、檢討をしてみたい。

三　新刊類編歷擧三場文選

上に掲げた『元進士考』の構成を見ると、錢大昕が典據として『歷擧三場文選』を利用していることがわかる。この文獻は、日本では靜嘉堂文庫に所藏されているが、これまで利用されたことがほとんどない。[20] また、後述するように、少なくとも五、六種の版本が存在するが、國內外を含めて靜嘉堂文庫本が唯一の完本のようである。[21]『元進士考』の構成の箇所に注記したように、錢大昕も不完全本しか見ていない。以下、この書物の內容を紹介するとともに、その成立と制度史資料としての位置付けについて考えてみたい。

さて、『歷擧三場文選』が對象とするのは、延祐甲寅（元／一三一四）から、元統乙亥（元／一三三五＝至元元）までの、計八

次の科擧で、鄕試から廷試までの各段階の答案が選ばれている。元統乙亥については、鄕試しか收載されていない（科擧中斷のため）。全體は、甲から辛の八集からなるが、全體の構成と、各集に附された出版者名、日付は、次のとおり。

序文　至正辛巳六月旣望吉安安成後學劉貞仁初謹書

綱目　題記：至正改元辛巳歲菊節建安後學虞埜文質謹咨

甲集　經疑　封面なし　題記：元統乙亥菊節建安虞氏務本齋謹題

※七科のみ

乙集　周易　封面：務本書堂

丙集　尙書　封面：務本書堂

丁集　毛詩　封面：務本書堂

戊集　禮記　封面：務本書堂

己集　春秋　封面なし

庚集　古賦　封面：務本書堂　題記：至正辛巳夏六建安余氏勤德堂謹題

※奎章閣本庚集古賦題記：至正辛巳夏五月建安虞氏務本齋謹題

辛集　詔誥章表　封面：務本堂　題記：至正改元辛巳菊節建安虞氏務本堂謹題

※詔は甲寅（延祐元）、丁巳（延祐四）、癸亥（至治三）、誥・章表は甲寅、丁巳のみ

壬集　對策　封面：勤德書堂　題記：至正元年中秋日古杭余氏勤德堂謹題

癸集　御試　封面：至正元年新集（版元名なし）

※七科のみ

『元史』選擧志や皇慶の科擧實施の詔敕（『元典章』他所載）によれば、元朝の科擧では、漢人南人については、鄉試、會試では、第一場で經疑二問（四書）、經義一問（五經）、第二場は古賦詔誥章表から一道、第三場は策一道と定められており、『歴擧三場文選』の構成は、この規定と對應している。また、各集は八卷からなるが（甲集、辛集、癸集を除く）、各集の構成を、乙集の易義を例にとって述べてみると、全八卷の各卷が、延祐甲寅鄉試乙卯會試の第一科から、元統乙亥鄉試のみの第八科までの八次の科擧にあてられている。各卷には江浙、江西、湖廣の江南三省を中心に、年によっては、燕南、河南などの鄉試と會試（各卷の最後に置かれる）から答案が選ばれ、多くの答案には、作者の籍貫と順位が附せられ、考官の批語のあることが多い。

さて、『歴擧三場文選』は、錢大昕がおこなったように多くの科擧合格者の名前を拾い出せるという點でも有用な資料ではあるが、本書の成立と受容を考えると、中國出版史の上からも興味深い資料である。ここでは、その點について述べておきたい。

科擧受驗の參考書の類が宋代においてすでに存在したことについては、よく知られている史料であるが、岳珂の『愧郯錄』卷九・場屋編類之書に、科擧に關する規定を編集し、答案の綱要を拔書きして、準備ができるようにした本がたくさんあり、建陽の書肆では、少しでも新しい事を賣り物にして、速く售れることをねらうことが書かれ、[22] 北宋の政和四年（一一一四）六月一九日に、權發遣提擧利州路學事黄潛善が禁止の上奏をしたことも記されている。また、元代でも、陶宗儀の『南村輟耕錄』卷二八・非程文に、各行省の鄉試の合格者の姓名を集めて登科記の如きものを作り、營利のために出版する者がいたことが書かれている。[23]

たしかに、宋代麻沙坊刻の科擧參考書として、劉達可の『璧水群英待問會元選要』や『選青賦箋』（天祿琳琅書目卷三著錄）などの存在を『福建出版史話』は擧げているが、筆者が見ることのできた『璧水群英待問會元選要』（『四庫存目叢書』影印明活字本、內閣文庫藏正德四年愼獨齋刊本）は、主題ごとに文例を擧げたもので、本書のように、作者や年次を掲げて答案を類聚したものではなく、おそらくは、こうした形式の科擧答案集としては、『歷擧三場文選』が現存最古のものであろう。[24]

さて、本書の成立について考えてみよう。すでに本書の構成について書いた部分で掲げたように、靜嘉堂文庫本『歷擧三場文選』の多くの集の最初に題記がある。そのうち、日付のあるものを、日付順に書肆名とともに竝べてみる。

元統乙亥（三／一三三五）菊節建安虞氏務本齋（靜嘉堂文庫本甲集經疑卷頭）
至正辛巳（元／一三四一）夏五月建安虞氏務本齋（奎章閣本庚集古賦卷頭）
至正辛巳夏六建安余氏勤德堂（靜嘉堂文庫本庚集古賦卷頭）
至正辛巳六月旣望吉安安成後學劉貞（序文）
至正元年中秋日古杭余氏勤德堂（靜嘉堂文庫本壬集對策卷頭）
至正改元辛巳歲菊節建安後學虞埜文質（靜嘉堂文庫本綱目卷頭）
至正改元辛巳菊節建安虞氏務本堂（靜嘉堂文庫本辛集詔誥章表卷頭）

こうしてみるとわかるように、元統乙亥と至正辛巳の二つの年のものがあり、余氏勤德堂と虞氏務本齋の二つの版元の名前が見える。とくに、庚集古賦については、題記本文は同文でありながら、靜嘉堂文庫本と奎章閣本で、日付も卷頭題記の出版者名のいずれもが異なっている。ちなみに、余氏と虞氏はともに有名な建安の書肆で、葉德輝『書林清話』でも言及されている（卷二宋建安余氏刻書、卷四元時書坊刻書之盛）。また、近年、福建においては出版史研究が盛んで、現地の利點を生かした研究が多く發表されており、謝水順他『福建古代刻書』、李瑞良『福建出版史話』などが、その代表的業績であ

るが、いずれにおいてもこの二つの書肆は取りあげられている（ただし本書には言及していない）。

それでは、これらの事實を踏まえると、本書の成立についてどのように考えることができるであろうか。

それには、題記と内容の二つの面からの検討が必要となる。まず内容からであるが、すでに述べたように、本書に收められている答案のうち一番新しいものは、元統三年の鄕試のものである。[25] また、題記については、元統乙亥、すなわち三年のものがある一方で、至正辛巳、すなわち元年（一三四一）の題記もある。このうち、元統三年の題記を持つのは、甲集・經義であるが、題記の文中には八科とあるものの、元統癸酉までの七科の答案しか收錄されていない。『元史』その他に據れば、鄕試は八月二十日から二六日にかけておこなうと定められており、題記のとおり菊節、すなわち九月九日の刊行であれば、この年の鄕試の答案の收錄はできなかったと考えられる。[26]

もう一つ考慮せねばならないのは、よく知られているように、元朝の科擧は、順帝の後至元元年に中斷したことである。『元史』の本紀には、卷三八順帝本紀一の至元元年一一月庚辰條に、「詔罷科擧」とあり、再開については、卷四十順帝本紀三の至元六年一二月條に、「復科擧取士制」とある。すなわち、後至元元年（元統三年）の一一月に中止が決まり、再開が決まったのは、後至元六年の一二月で、至正元年に鄕試が、翌二年に會試、廷試がおこなわれた。

これらの封面、題記の記事と、科擧をめぐる情勢とを手がかりに、本書の成立について考えてみると、本書が編まれたのは、題記から考えて元統三年のことであろう。次の科擧のための出版物として本書は編まれたが、科擧は中斷してしまった。そして、科擧再開の詔が出て鄕試がはじまった至正元年になって、元統三年の鄕試の答案を追加した上で、新しい序文と題記を得て刊行されたと理解するのが、妥當ではないだろうか。綱目の題記の文中に、「丙子之歲（後至元二年）梯雲路阻、擧業中輟、斯文無殷實、信乎、今欽惟聖天子德盛敎萌、詔復擧制」とあり、辛集・詔誥章表のそれでは「聖朝詔復科擧」という表現があるのも、至正の科擧再開と本書の出版が關係することを表している。

また、上にも書いたように、二つの書肆の名前が併存することについて、本書を解題する『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』（一九九二）は、共同出版、あるいは版木の移動の可能性を指摘している。そこでは指摘されていない、同じ庚集古賦において、靜嘉堂文庫元刊本と奎章閣朝鮮刊本で、題記は同文でありながら日付と書肆の名前が違うことも考え合わせると、版木の移動の可能性が大きいと考えられる。

ただし、以上の推測だけでは説明できない點がある。それは、卷頭の「聖朝科擧進士程式」のうちの、「終場擧人充教官」に、至正三年三月とある事實である。これは、至正元年刊行という上の推測と矛盾する。この條はちょうど一葉を費やしているので、後の挿入と考えることもできよう。しかし、靜嘉堂文庫本には、やはり「聖朝科擧進士程式」の「延祐元年六月中書省咨」に、他の部分と字體が異なる葉が存在する。この葉は前の葉と文章が續いており、後から記事が挿入されたための變化ではなく、しかも、この葉だけに墨釘が存在する。墨釘を再刻の際に底本とした本の判讀不能の部分であると假定すれば、本書の成立は至正元年段階であるものの、靜嘉堂文庫本は後に修訂された本である可能性が考えられる（ちなみに、丁付けは連續している）。

『歷擧三場文選』の注目すべき點の第二は、その受容である。上に書いた靜嘉堂文庫本についての推測があたっているとすれば、本書は版を重ねているということになるのだが[27]、それはさておき、明代においても本書が利用されていたことが、『永樂大典』における本書の引用でわかる。すなわち、卷六六二一・辟廱賦（延祐二年會試）、卷三五一九・金馬門賦（至順癸酉＝元統元年江西鄉試）において、それぞれ「三場文選」の見出しで引用があり、いずれの賦も、現存の『歷擧三場文選』にも收錄されている。

さらに、朝鮮においては、一五世紀に『歷擧三場文選』が何種類か出版されており、韓國の圖書館には異版が多數所藏されている。筆者が現物調査できたものと目錄類で目にしたものとを整理すると、少なくとも次のような版本の存在が想

定できる。

對策（癸未字小字　一四〇三、誠庵文庫、『韓國古印刷史』に圖版あり）

經疑（庚子小字　一四二〇、誠庵文庫、『韓國古印刷史』に圖版あり）

古賦八卷（景泰五年／端宗二年／一四五四）密陽府刊（內閣文庫、奎章閣、韓國國會圖書館他）

對策（庚子字覆刻）

內閣文庫本對策（端宗二年密陽府刊の古賦との合せ本、對策には刊記なし、右の庚子字覆刻本と同一本かどうかは不明）

註21に書いたように中國國內には殘本すらほとんど殘らないこの本が、朝鮮時代に何度か出版されたことは興味深い。ただし、異なる集にまたがる本が現存しないことや、奎章閣本の『古賦』が、單獨で序跋を有することなどを考えると、[28]朝鮮においては各集ごとで刊行された可能性が大きい。

なお、元代にはもう一つ科擧の答案集が存在する。それが、國內では內閣文庫に所藏されている『皇元大科三場文選』である（以下、『大科文選』と略）。[29]內閣文庫本を見る限り刊記はないが、至正甲申（四／一三四四）の廬陵劉時懋の跋がある。跋の文中に、「三朝文選、已に前に見われ、今、後科の英俊を摭（あつ）めて、梓に鐫す」という表現があり、本書が『歷擧三場文選』の後繼を意識して編まれたものであることがわかる。

構成は、易義、書義、詩義、禮記義、春秋義、易疑、書疑、詩疑、禮記疑、春秋疑、四書疑、詔誥、表、古賦、策、廷試策からなり、鄕試、會試、廷試の答案が集められている。『歷擧三場文選』と比べると、項目の排列の違いがあるが、これは、至正の科擧再開に際して出された條畫によると、第一場の經疑が、四書一題、五經一題に變わっており、このことに對應していると思われる（『歷擧三場文選』聖朝科擧進士程式所引至元六年一二月科擧條畫）。書中には、收錄對象としたのが何年の科擧かは明示されていないが、廷試に採錄された人物の中に至正二年の進士であることが確認できる人物がいることか

ら考えて、至正元―二年（一三四一―二）の科舉における答案を集めたものと考えていいであろう。序文の至正四年は再開後二回目の鄉試實施の年である。なお、錢大昕は『大科文選』は見ていないようである。

附　制度資料としての『新刊類編歷擧三場文選』

「歷擧三場文選」は、卷頭に「聖朝科擧進士程式」と題して科擧に關する公牘を多數掲載する。したがって科擧制度資料としても有用な文獻であるので、そのことについて觸れておきたい。

言うまでもなく、各時代の科擧についての基本資料として、正史の選擧志があり、『元史』においても、卷八一以下の四卷が選擧志に充てられている。ただし、科擧についての記述は、選擧志のうち、卷八一の前半、科目の部分のみである。よく知られているように、『元史』の志の部分は基本的には、至順三年（一三三二）に上進された『經世大典』に基づいて編まれたから、後至元年間の中斷以降の科擧が對象外となり、それについては、卷九二・百官志八の末尾に、「選擧附錄」と題して付されている。『元史』のこれらの部分を參照すれば、元朝の科擧についての基本的な事項について知ることはできるが、さらに、元朝史研究の他の分野と同じく、『元典章』（禮部四・學校・儒學）や、『通制條格』（卷五・學令）などの法制資料にも科擧關係の公牘が存在し、さらに、すでに有高32も指摘するように、『翰墨全書』にも科擧門が存在して、公牘類を收める。米澤市立圖書館所藏元泰定刊本では庚集、また、四庫存目叢書本（底本は明初刊本とする）や、京都大學附屬圖書館近衞文庫所藏正統丙寅翠巖精舍本、內閣文庫所藏正德元年王氏善敬書堂刊本などの明刊本では、辛集卷九がそれであるが、內容はいずれも同內容である。また、『元代史料叢刊』の『廟學典禮』（浙江古籍出版社）に附載されている『古學彙刊』所收の『元婚禮貢擧考』も、『古學彙刊』の「提要」によれば、『翰墨全書』から婚禮と科擧關係の資料を抄出したものである（なぜか『元代史料叢刊』の出版說明にはそのことに言及されていない）。

表1　科擧制度關係資料引用リスト（『歴擧三場文選』の掲載順による）

元降詔旨（皇慶年月日）	歴、通、典、翰、貢
中書省奏准試科條目（皇慶二年一一月）	歴、通、典、翰、貢
纍朝頒降條畫	
延祐七年三月	歴、典
天曆元年九月	歴
天曆二年八月	歴
元統二年十月	歴
都省奏准科擧條畫	
至元六年一二月初三日	歴
至正元年七月日	歴
終場擧人充教官（至正三年三月）	歴
延祐元年六月中書省咨	歴
延祐二年二月中書省劄付（會試程式）	歴
試卷不考格（假題）	
延祐元年翰林國史院經歴司呈	歴
延祐元年中書省咨	歴
延祐元年中書省咨	歴
延祐三年中書省禮部呈表章格式	歴
鄉試程式（延祐元年）	歴、翰、貢
□□册帖□式	歴
會試程式（延祐二年）	歴、翰、貢
御試程式	歴、翰、貢
進士受恩例（延祐二年四月）	歴、翰、貢
朱文公學校貢擧私議	翰、貢

注記　歴：歴擧三場文選（靜嘉堂文庫本）、通：通制條畫（卷五學令科擧）、典：元典章（禮部學校）、翰：新編事文類聚翰墨全書（泰定刊、庚集科擧門）、貢：元婚禮貢擧考（古學彙刊）

ここでは、これら五つの文獻に收錄されている詔敕や公牘の類を整理して一覽表にしてみた。それが上の表である。[30]

この表を見ていただければ、『元典章』、『翰墨全書』、『歴擧三場文選』の順で、資料が增加しており、『歴擧三場文選』には他の文獻には見られない資料が含まれていることが、おわかりいただけるであろう。これは、一つには、『元典章』が、新集を入れても至治二年（一三二二）までの資料であり、『翰墨全書』が泰定刊本であるのに對して、『歴擧三場文選』は、すでに檢討したように元統三年以降の成立であるから、當然のことであるが、元來科擧對策の書物として作られたものであるが故に科擧の細部に關わる規定が少なからず收められている點に、本書の資料としての特色がある。

以上のように、科擧制度史料としての價値が高い、『歴擧三場文選』の「聖朝科擧進士程式」であるが、ここではその點の指摘にとどめ、これらの公牘類の內容について考えることは次の機會としたい。

四　錢大昕の見た資料、見ていない資料—結びに代えて

ふたたび、錢大昕の『元進士考』に戻る。科擧合格者の分析、とくに合格後の彼らについての追跡は、元朝時代に科擧の有した意義の解明に直接關連するものと言える。[31] そのための第一歩として、科擧の合格者をどれだけ検出できるかが課題となり、延祐の科擧再開から、通算一六回おこなわれた科擧の、合計一一三五（あるいは一一三九）名の合格者について、どれだけの人名を検出し、その人物について追跡できるかという問題になる。錢大昕の科擧研究の目的がどこにあったかはさておき、『元進士考』の公刊は、こうした作業をさらに進めることになろう。一方で、現在の我々をとりまく資料狀況は錢大昕の生きた乾嘉年間よりもはるかに惠まれ、しかも昨今の狀況の變化の著しいことは、本稿の冒頭でも述べたところである。その點に觸れて結びに代えたい

まず、『元進士考』において錢大昕が引用する文獻を大雜把な分類で配列してみよう（表記は『元進士考』に基いたが、同一書が複數の名前で登場する場合は統一した）。

史部　元史、朝鮮史畧

地志　浙江志、江西志、福建通志、陝西通志

湖北：蘄州志、浙江：杭州府志、江西：奉新縣志、江蘇：金陵新志、松江志、（盧熊）蘇州府志、江寧志、江都縣志、山西：汾州府志、汾陽縣志、陝西：三原縣志、城固縣志、廣東：肇慶府志、河北：天津府志

集部　總集　（元）文類、中州文表、元詩選、列朝詩集、元音

別集　圭齋集（歐陽玄）、黃文獻公集（黃溍）、吳草廬集（吳澄）、袁桷集、馬石田集（馬祖常）、道園集（類稿・學古錄、虞集）、宋濂集、吳禮部集（吳師道）、滋溪集（蘇天爵）、陳衆仲集（陳旅）、黃清老詩、楊鐵崖集（楊維禎）、薩都剌集、揭文安集

（揭傒斯）、余青陽集（余闕）、張紳詩、王禕集、傅與礪詩、呂思誠、許有壬（最後の二人は名前のみで引用）

その他　遂昌雜錄（元・鄭元祐）、輟耕錄（元・陶宗儀）、豫章漫鈔（明・陸深）、鐵網珊瑚（明・都穆）

不明　元詩爵里[32]、鷄肋集

石刻　山東鄉試題名記（至正一〇年、二二年）、霍希賀撰蘇有神道碑、歸安縣建學記（湖州）、長興州石刻（湖州）、雲水龍祠石刻、代祠南海廟記

こうしてみると、黃兆強氏が整理した、『二十二史考異』の引用書目と比べれば、こちらの方が多岐にわたるが（黃00參照）、それでも錢大昕の引用する資料は決して多いとは言えないと感じさせる。

そこで、今日における研究と資料の狀況とを見るために、『元進士考』と最近の研究とをその引用資料で比較してみたい。これまでにも、計一六回の科擧のうち、延祐二年（植松89、樓82）、泰定元年（陳96）、元統元年（蕭83、楊94）、至正一一年（蕭86）の各年次については、それぞれ（　）内に注記した研究が存在するが、このうち、各種の文獻に散在した進士名を集めている點で、作業方法が『元進士考』に近い、泰定元年についての陳高華氏の研究を、錢大昕のものと比較することにした。それが、次の頁に、表2として揭げた對照表である。

表を參照していただければわかるように、檢出されている進士の數が、陳氏においては、大幅に增加している。しかも、典據としている資料が多種で、より同時代に近いものになっている。數の點では、この年の登第者である宋褧の『燕石集』に關係資料がいくつか含まれており、陳氏はそこからかなりの進士名を收集することができたということもあるが、それをも含めて、今日我々が置かれている資料狀況が、格段に惠まれたものであることがわかるであろう。これらの資料の中には、最近になって利用が可能になったものも含まれている。

最初に、この論文の執筆の背景に資料狀況の變化があると書いた。それは、主題とした錢大昕の著作や、元朝資料など

表2　陳高華と錢大昕の比較（泰定甲子科）

左榜　一七名	
八剌（狀元）：元史	錢：なし（出典の表示なし）
塔不臺：燕石集	
諳都樂：燕石集	
伯顏（二名）：燕石集	
粤魯不華：燕石集	
曲出：燕石集	
雅琥：燕石集、秘書監志、元詩選	
納臣：燕石集	
傑直堅：圭齋文集、金華黃先生集	錢：圭齋文集
師孛羅：柳待制集	
天祐（唐兀）：金華黃先生集	
揑古柏：至正四明續志	
彥文：吳文正集	
那木罕：秘書監志	
完迮不花：秘書監志	
完澤溥化：元史、正德松江府志	錢：松江志、歸安縣縣學記
右榜　三二名	
張　益（狀元）：元史	錢：なし
宋褧：燕石集（撰者）	錢：なし
張　彝：燕石集	
王守誠：元史、燕石集	錢：なし
程　詠：燕石集	
王瓚：國朝文類、燕石集、學古錄	錢：元詩爵里
章　毅：燕石集	錢：江西志
程　謙：燕石集	
王　理：燕石集、元詩選	
成　鼎：燕石集	
姜天麟：燕石集	
趙時敏：燕石集	
段天祐：燕石集	錢：元詩爵里
呂思誠：元史	錢：なし
汪文璟：弘治衢州志	錢：陳衆仲集、浙江志
史駉孫：清容居士集	錢：浙江志
程端學：清容居士集	錢：圭齋集
馮翼翁：申齋集	錢：江西志
林仲節：八閩通志	錢：福建通志
楊　衢：槎翁詩集	
趙宜中：吳文正集	錢：吳文正集
彭士奇：圭齋集	錢：江西志
孔　濤：金華黃先生集	錢：金華黃先生集
曾　翰：吳文正集	錢：吳文正集、江西志
鄭　僖：始豐稿	
費　著：永樂大典	
張　復：八閩通志	錢：福建通志
吳　暾：嘉靖淳安志	
劉　埜：嘉靖廣信府志	錢：江西志
李時翁：萬曆吉安志	錢：江西志
曾俊玉：萬曆吉安志	錢：江西志
李　運：萬曆吉安志	錢：江西志
周子善（陳氏なし）	錢：元詩爵里、江西志

の文獻の公刊による利用の利便化だけではない。筆者が、『歴擧三場文選』について検討を加えるきっかけとなったのは、韓國訪書の機會を得て、韓國所在の同書についての知見を得ることができたからであり、北京孔子廟の碑刻を現地で見ることによって、この碑の持つ問題點はより明確になった。また、陳高華氏は、訪日の機會に、靜嘉堂文庫や內閣文庫の『歴擧三場文選』、『大科文選』を調査されている。蕭氏が、元統元年題名錄や至正十一年碑について取りあげられたのは、八十年代前半のことであり、氏は北京圖書館所藏の關連史料を見ておられなかったようであるが、その後、現地で調査をされたことは、蕭88や楊94によって知ることができる。このように元朝科擧研究においては、國際的な交流が具體的に研究の進展を生み出している。冒頭にも記したように、蕭氏は、これまでに檢出した元朝進士名のリストを公開することを計畫されている。おそらく、こうした資料狀況の變化が氏の作業には反映され、より進んだものとなっていると豫想される。氏の成果をベースとした國際的な交流が元朝科擧研究をさらに推し進めるものと期待される。

付記

本論文中に使用した各種の文獻の利用にあたっては、京都大學人文科學研究所の金文京氏のお世話になった點が少なくない。末尾ではあるが感謝の氣持ちを記しておきたい。また、本論文は、平成一〇年度～一二年度の科學研究費基盤研究（C）「石刻資料による元朝漢人知識人社會の研究」の成果の一部である。

註

（1）最近の研究で『元史稿』に言及したものとしては、『嘉定錢大昕全集』前言、顧97、黃00などがある。また、註15で引いた「至正庚子貢試碑」の王鳴韶の跋には、錢大昕は收集した拓本を『元遺事』に收めていたとある。

（2）たとえば、堤一昭「一九九九年の歴史學界・五代宋元」（『史學雜誌』一〇九―五）を參照。

（3）延祐二年の進士については、樓83にも言及されている

（4）この卷には、この他に元朝の科擧に關連する資料として、『宋歴科狀元錄附元朝歴科狀元題名』（明・朱希召撰、明刻本）も收錄されている。

（5）この題跋は、『蕘圃藏書題識』卷二、あるいは『蕘圃題跋』（上海遠東出版社、『宋明清小品文集輯注』）卷二に收められている。

(6) 影印本が鐵琴銅劍樓本であることは、瞿氏本を用いた楊94の校訂の内容からも確認できる。

(7) 『中國古籍善本書目』には、北京圖書館、上海圖書館、南京圖書館所藏の本が著錄されており、上海本には錢跋、南京本には丁丙跋があると注記がある。丁丙の『善本書室藏書志』巻九に、張蓉鏡の藏印がある影元鈔本が著錄されているのが、南京本であろう。また、『愛日精廬藏書志』巻一三にも、影元刊鈔本が著錄されている。

(8) 『宋元科擧三錄』の徐乃昌跋には言及されていない。

(9) 蕭氏はその後に鈔本を調査し、それによって蕭88では舊稿を補正している。

(10) 臺灣および米國における拓本などの資料所藏狀況については蕭83註2參照。

(11) 所收の李丙奎、羅曾の答案は、『歷擧三場文選』にも收錄されている。また、王德毅他編『元人傳記資料索引』に名前が見えるのは、羅曾、李路の二人のみで、ともに登第している。

(12) 文集に所收の國子監試の資料として、蘇天爵の『滋溪文稿』巻三に「國子生試貢題名記」がある。これは至正五年の國子監試の碑記である。これにも刻石のことが記されており、國子監には、科擧の進士題名碑と國子監試の題名碑が竝んでいたらしい。

(13) 『孔廟國子監紀畧』(民國二二／一九三三、內政部北平壇廟管理所)は、「大德加封碑」、「加封四子碑」も康熙出土とするが(明代丞取元進士碑磨去刻字、淸康熙朝、祭酒吳苑於啓聖祠掘土得加封孔子碑一、加封四子碑一、題名碑三、故元碑現只存五石)、この二碑については、明の『太學志』や『水東日記』に記事があり、康熙の出土とは考えられない。注10でも引いた蕭83の註2によれば、臺灣、米國にもこの碑の拓本は存在しないようである。

(14)

(15) 至正十一年進士題名記、至正庚子國子監貢試題名記、至正丙午國子監公試題名記、三碑俱在今國子監大成門外。錢竹汀先生陪祀時見之、採錄入元遺事中。每篇之後、繫以考据、亦皆先生筆。予從其齋借得抄成一篇、附于山東鄉試題名記後。先生止節取其大畧及科目人名氏、其記文與執事官僚皆未之寫、爲非全文故從附錄云。時乾隆乙未十一月二十有八日鶴谿居士王鳴韶書

(16) 後述するように、『歷擧三場文選』の內容の大部分を占めるのは、鄉試の答案であり、鄉試の資料としての意味が大きいが、いずれも『歷擧三場文選』は利用していない。

(17) 解題とでも言うべき全集の「前言」には、このことは記されていない。また、『北京圖書館古籍善本書目』もこのことに言及しない。

(18) ちなみに至治元年の漢人南人の狀元は宋本。林仲茂の名前は王德毅他編『元人傳記資料索引』に見えない。

(19) 錢大昕が引用している省志がいつのものかを記しておく。

浙江　雍正(乾隆)通志(康熙通志は內容が異なる)

福建　乾隆通志に注記まで一致(同治通志は少し異なる)

陝西　陝西志として引用されている進士名は、雍正通志に年號を附して載せられている者のみ

江西　康熙、雍正の通志にほぼ一致するが、完全には合わない。

その他に、林志(嘉靖志、編者が林庭棉)、安志(不明)も引く。

(20) 本書の後繼とでも言うべき『元大科三場文選』については、三浦98が利用しているが、書物としての檢討はなされていない。また、中國社會科學院の陳高華氏も、筆者とほぼ時を同じくして『歷擧三場文選』に關心を持たれていることを知り、お互いに奇遇に驚いたのは、九八年秋にお會いした時のことであった。陳氏が二〇〇〇年の八月に天津で開かれた「馬可波羅與十三世紀的中國」において、本書についての研究を發表されていることを、松田孝一氏の教示で知った。筆者も招待を受けていたが、殘念ながら參加することができず、その內容が出版されるのを期待している。

(21) 本書についての中國の著錄は、まず『北京圖書館古籍善本書目』には、

新刊類編歷擧三場文選詩義八卷　劉貞　元刻明修本

新刊類編歷擧三場文選庚集八卷辛集□卷　劉貞　至正元年余氏勤德書堂　古賦一至六、辛集詔誥一至二、章表三

の二つが見え、前者は『鐵琴銅劍樓藏書目錄』卷三著錄本であり、『中國古籍善本書目』には、後者のみが著錄されている。

また、潘國允・趙坤娟編『蒙元版刻綜錄』（内蒙古人民出版社、一九九六）には

新刊類編歷擧三場文選十集　劉貞　至元二年余氏勤德書堂

新刊類編歷擧三場文選春秋義　八卷　劉霖

新編詔誥章表事文擬題五卷皇元大科三場文選二卷新編詔誥章表事實四卷　元刻本

の三種が著錄されているが、所藏者は書かれていない。

これらの點から考えると、現物を確認していないので斷定的なことは言えないが、複數の系統の版本が存在する可能性が大きい。

(22) 自國家取士場屋、世以決科之學爲先。故凡編類條目、撮載綱要之書、稍可以便檢閱者、今充棟汗牛矣。建陽書肆方日輯月刊、時異而歲不同、以冀速售（以下畧）

(23) 各行省鄉試、則有人取發解進士姓名、一如登科記、鋟梓印行、以圖少利

(24) 『天祿琳琅書目』は、『選青賦箋』について、「卷中に錄するところ、盡く當時の省試の作なり」とあって、科擧の答案集の可能性がある。また「建安王懋甫刻梓於桂堂」の木記があるとしているので、福建坊刻の書であると考えられる。しかしながら、『福建古代刻書』が「世無傳本」とするように、現時點では所藏の著錄を知らず、現存するか否か分からないので、この書物については保留とする。

(25) 『元史』卷三八順帝本紀一によれば、元統三年一一月辛丑に改元の詔が出されている。それよりも一一月庚辰の科擧中止の方が先であり、『歷科三場文選』では、元統三年で統一されている。

(26) 例えば、『道園類稿』卷二六「江西貢院題名記」では、至正四年の江西鄉試は九月一五日に放榜がおこなわれている。なお、御試も後至元の中止のために七科となっている。

(27) もし、假定に假定を重ねることが許されるなら、元統三年本はともかくとしても、至正元年刊本、「終場擧人充教官」を補った本、一部を後刻で補った本、これだけの本が理論的には存在したことになる。

(28) 奎章閣本古賦には、卷頭に、『歷擧三場文選』のための劉貞の序、「至正辛巳夏五月建安虞氏務本齋謹題」とする題記があり、卷末に、景泰五年仲秋既望の孫肇瑞の跋（古賦のためのもの）と、「甲戌八月日密陽府開刊」という刊記がある。

(29) 『皇元大科三場文選』については、

『北京圖書館古籍善本書目』には

皇元大科三場文選四書疑一卷、周易疑一卷、易疑一卷、書疑一卷、書義一卷　周旁　至正四年刻本

が、著錄され、『蒙元版刻綜錄』には、同じ至正四年刻本のほか、註21にも掲げた

新編詔誥章表事文擬題五卷皇元大科三場文選二卷新編詔誥章表事實四卷　元刻本

が、著錄されている。

(30) この他に、内閣文庫元刊本『事林廣記』後集六學校類新條畫及科擧詔例に、「元降詔旨」、「中書省奏准試科條目」、「廻避廟諱字例（延祐二年）」が、和刻本『事林廣記』辛集詞帖新式に「儒人赴試結保」が、掲載されている。

(31) 植松89參照。

(32) 錢大昕は『元進士考』の中で『元詩爵里』なる書物をしばしば引用する。しかしながら、管見のおよぶ範圍ではこの書物の所藏を見ない。ご存知の方がおられれば、ご敎示をたまわればさいわいである。

文獻目錄

田中萃一郎　元の官吏登庸法について（史學雜誌二七―三　一九一五）

箭内　亙　元代社會の三階級（滿鮮地理歷史研究報告三　一九一六、後『蒙古史研究』所收）

有高　巖　元代科擧考（史潮二―二　一九三二）

宮崎市定　元朝治下の蒙古的官職をめぐる蒙漢關係―科擧復興の意義の再檢討（東洋史研究二三―四　一九六五、全集第一一卷所收）

楊　樹藩　元代科擧制度（國立政治大學報一七　一九六八）

蕭　啓慶　元代的儒戶：儒士地位演進史上的一章（東方文化一六―一・二　一九七八、『元代史新探』所收）

姚　大力　元朝科擧制度的行廢及其社會背景（元史及北方民族史研究集刊六　一九八二）

丁　昆健　元代的科擧制度（華學月刊一二四、一二五　一九八二）

樓　占梅　伊濱集中的王徵士詩（史學彙刊一二、一九八三）

蕭　啓慶　元統元年進士錄校注（食貨月刊一三―一・二、三・四　一九八三）

蕭　啓慶　元至正十一年進士題名記校補（食貨月刊一六―七・八　一九八八）

蕭　啓慶　元代科擧與菁英流動―以元統元年進士爲中心（漢學研究五―一　一九八七）

植松　正　元代江南の地方官任用について（法制史研究三八　一九八九）

森田憲司　元代漢人知識人研究の課題二、三（中國―社會と文化五　一九九〇）

楊　訥　元統元年進士錄版本與校勘（『祝賀楊志玖教授八十壽辰中國史論集』天津古籍出版社　一九九四）

陳　高華　元泰定甲子科進士考（南京大學元史研究室編『內陸亞洲歷史文化研究』南京大學出版社　一九九六）

謝水順他　『福建古代刻書』（福建人民出版社　一九九七）

李　瑞良　『福建出版史話』（鷺江出版社　一九九七）

張　寧　北京孔廟進士題名碑（『北京石刻藝術博物館建館十周年記念文集』一九九七）

顧　吉辰　錢大昕與《元史稿》下落（嘉定區地方志辨公室編『錢大昕研究』華東理工大學出版社　一九九七）

三浦秀一　宋濂「龍門子凝道記」と元末明初の諸「子」（集刊東洋學七九　一九九八）

蕭　啓慶　『元代蒙古色目進士背景的分析』（國家研究菁英演講會　一九九九a）

李　治安　元鄉試新探（南開學報　一九九九―六）

森田憲司　異民族王朝下の科擧（しにか　一九九九―九）

蕭　啓慶　元朝科擧與江南士大夫之延續（『元史論叢』七　一九九九b）

黃　兆強　『清人元史學探研―清初至清中葉』（稻鄉出版社　二〇〇〇）

本研究は、共同研究「文獻と情報」（班長　勝村哲也）の報告である。